

- 敬神略説 渡邊重春著
- 神教祖述カミノヲシヘノミチビキ 新井繁豊著
- 開化年中行事 松井惟利著
- 年中神拜略記 近衛忠房著
- 年中敬神録 宇喜田小十郎著
- 東京土産 元田直著
- 神宮神誠註釋 葵川信近著
- 大道要義 千家尊福著
- 訓蒙建國之體略 田中尙房著
- 皇大神宮大麻奉祀式 浦田長民著
- 神道摘要 同著
- 神德論 田中賴庸著
- 本教略圖説 福住正兄著
- 祓のすゝめ 同著

明治初年
に於ける
神道家

- 素尊解除神教 穂積耕雲著
- 説教大意 大久保好伴著
- 文明開化(四卷) 加藤祐一著
- 開化古徴(二卷) 柴田花守著
- 正直の首かちくに神やどる 伊藤清捷著
- 幼童必學説教心得草(四卷) 瓜生政和著
- 説教民間婚禮式 田方宜和著
- 神教叢語(第一號……第八十七號?)
(明治九年十月……同十一年十一月?) 神道諸家の説載録

明治初年の神道教化運動に参加した神道家の主要な人たちは、若しくは其の著述の多い人
人について一瞥すると、大國隆正、矢野玄道、權田直助、近藤芳樹、近衛忠房、千家尊澄、
同尊福父子、伊能穎則、堀秀成、落合直亮、同直澄兄弟、鈴木雅之、平田鏡胤、同延胤父
子、鬼島廣蔭、八田知紀、岡本保孝、後醍院眞柱、羽田野敬雄、物集高世、村上忠順、猿渡
容章、同容盛父子、久保季茲、浦田長民、岡吉胤、常世長胤、飯田年平、渡邊重春、同重

石丸、萩原正平、石河正義、久米幹文、田中頼庸、吉村正秉、平山省齋、穂積耕雲、柴田花守、稻葉正邦、佐々木祐肇、突野半、金光大陣、新田邦光、坂田鐵安、角田忠行等であつて、何れも當時の神道界活動のために、多かれ少かれ、その貢献を認められてゐるものである。又小野述信、栗田寛、福羽美静、黒田清綱、丸山作樂、三島通庸等の人々も當時の我が思想界に對して、神道的勢力を扶殖し、その發達に寄與する所が少くなかつたのである。

又當時に於ける神道界の宗教的運動の中で特に注意すべきことは、神宮教院の宣傳であつて、之に次いで、黒住教と禊教との兩者であつたと思はれる。伊勢神宮の神官は近衛忠房、田中頼庸等を中心に神宮教院を組織して、盛んに神道の宣傳に努めてゐる。左にその明治初年に於ける刊行書を列挙しよう(卷數は特に示したものの外は凡べて一巻である)

明治初年
に於ける
諸活動

(1) 神宮教院

- 神教綱領(近衛忠房著)
- 神教綱領演義(山口起業者)
- 教會要旨(同 右)
- 年中神拜略記(同 上)
- 神典探要(同 右)
- 神典探要通解 四卷(山口起業者)
- 五儀略式、解除式(同 右)
- 皇大神宮大麻奉祀式(浦田長民著)

大教院 十一 說解義(浦田長民著)

神宮 神教軌範(神宮教院編)

神宮 靈祭式(三條西季知)

大道本義 三卷(浦田長民著)

神宮 神誠註解(葵川信近著)

神宮 神判記實(初編上下から七編上下まで山口起業者)

尙ほ神宮教院の大阪支部たる神宮教會では大教院の『神教要旨』(小野述信著)、『神教要旨略解』(近衛忠房、千家尊福共著)、『葬祭略式』(同上)等を翻刻してゐる。次に黒住教は明治九年に修成派と同じく、いち早く一種の神道教派として其の宗教的獨立を許可されたのであるが、宗忠の教を敬信する森下景端、星島良平等の人たちが熱心にその教を弘め、又大國隆正、矢野玄道等の神道家もその教理の洗練に力を添へて、その感化の力も侮るべからざるものがあつた。良平

(2) 黒住教と禊教

の『誠の心傳』及び『宗忠神七箇條略解』、玄道の『七箇條鏡草』、小野辰定の『日廼御蔭』等相次いで出で、その後十七年に及んで良平の『道之琴俚諺解』、景端の『神理概論俚諺解』などが出版された。禊教は二十七年に別派獨立を許されるのであるが、夙く五年八月に井上正鐵の門人東宮千別、村越鐵人等が相謀つて吐善加美講を起し、翌年に至つて禊教と改稱した。又之と別に八年、同門の坂田鐵安等は惟神教會禊社を建設して、相並んで正鐵の遺教を宣傳したのである。現今の神道禊教はその後者の發達したものである。正鐵の『神道唯

一問答』は初め寫本のまゝで可なり多く普及したが、井上祐鐵の著はした『井上正鐵眞傳記』
(三卷)も見るべきものがある。又穂積耕雲は『禊事神傳式』、『素尊解除神教』等を公にしてを
 る。此の後二十年ごろになるが、坂田鐵安の『道廼菜』、『御大祭要略』、耕雲と東宮千別共
 著の『禊事教導心得』、横尾信守編輯の『井上正鐵翁遺訓集』(六卷)、麻生正一編の『井上正鐵翁
 在島記』(三卷合二冊)等が相ついで出版されてをる。

是等は國學者若しくは純神道家の神道説が幽冥觀乃至來世觀を強調して來たのと相待つ
 て、明治初年に於ける神道の宗教的信仰の一面を語つてをるものであるが、此の後の兩教
 の外にも修成講社を起して後の神道修成派を形成した新田邦光が『教道大意』(四卷)を始めと
 して、その教派關係書を多く出してをることゝ、千家尊福が大社教の結成と其の宣傳に努
 力した事業とも亦注意すべきことであらう。要するに明治初期の神道家は所謂文明開化の
 大成を利用し又順應すべく、最善の活躍を爲し得なかつたことは事實であるが、とにかく
 其の力相應に神道的信仰の宣傳に努力したことは否むことが出來ないのである。

〔備考一〕 明治六年十二月、神宮少宮司浦田長民の制定頒布した『皇大神宮大麻奉祀式』(總振假字付)

皇大神宮大麻奉祀諭解

教(3)修成
と大社
派

凡世の人皆事に觸れて私情の動かざるを得ず、而して他人未だ之を知らざるも天神は既
 に照覽ましくて之を咎めたまふ。故に常に念頭に發る所を慎み、速に罪惡を除却せざ
 る可からず。而して其罪を拂除するの神具之を大麻と云ふ。毎歲神宮より頒賦する所則
 ち是なり。常に此大麻に向ひ敬拜するときは、念頭の罪穢消盡して今世には諸の災厄を
 除き、福壽延長死後は、永遠天上の娛樂を受く。故に毎朝毎夕拜禮を遂げ、且大祭祀日
 には左の式に由て典祀すべし。

皇大神宮大麻奉祀次第

毎年年末に到り新年に奉祀すべき大麻を拜戴せば、本年奉祀せし所の大麻を氏神の社頭
 に納め、但一年毎に大麻を氏神の社頭に納めず、其儘神あらた新に拜戴したる大麻を神棚に奉安し、戸主禮
 服を着し、家族を率ゐ、神棚の前にすゝみ各着座す。

先戸主神饌を供す。
 次戸主毎日神拜の詞下を奉讀し、訖て一同拜禮す。
 次神饌を撤し直會を分與して一家無爲の祝辭を演べ終日歡娛を極むべし。
 本日夕刻に至らば燈火を獻すべし。

一月一日以下祭日下には右の式に準じて之を奉祀すべし。

毎朝は先漱盥して、各神棚の前に座し、毎朝神拜の詞録下を稱へ、拍手一拜すべし。

神饌品目

洗米 酒 水 各一盛

此餘魚鳥海草野菜果物等を供するは適宜たるべし。

祭日

- 一月一日 四方拜日
- 一月三日 元始祭日
- 一月三十日 孝明天皇遙拜日
- 二月四日 祈年祭日
- 二月十一日 紀元節日
- 四月三日 神武天皇遙拜日

六月三十日 大祓日

九月三十日 神嘗祭日

十月三日 天長節日

十一月二十三日 新嘗祭日

十二月三十一日 大祓日

此餘、誕生創業婚姻奏功等凡て祝すべきことあるの日は必ず先づ祭式を行ふて後事に就くべし。其事の悉しきは五儀略式、年中神拜略記等に就て見るべし。

祭日神拜詞

掛万久毛 恐支天照皇大神宮乃大麻乎齋支祭禮留此神床爾慎美敬比仕奉且畏美畏美毛白久
 過知犯世留許々多乃罪乎水乃淡乃早瀬の浪爾消失留事乃如久淡雪乃春日乃影爾消失留事乃如久
 消失比賜比且皇大神乃貴乃御孫止大座須天皇尊乃所知食須政事波天地乃共平爾顯見蒼
 生乃生留日乃職業波彌益爾彌廣爾退禮留後乃快樂波永久爾無窮久守利賜比授氣賜布大御德
 平尊備喜留進留御酒御供乎平久安久所聞食止畏美畏美母白須

毎日神拜詞

掛万久毛綾爾恐支天照座皇大御神過知犯世留諸乃罪穢乎祓閉給閉清女給閉止恐美恐美母
白須

〔備考2〕 小川持正の『習字やまご魂』(明治六年刊)より

つきさかき、いづのみたまご天地に、いてりとほらす日の御神、その皇孫を日本の、帝
のはじめと定めつゝ、天より降したまへるは、萬物主宰の御中主、高御産巢日、神産巢
日、御祖の神の勅以て、するの世かけて億兆の、民にこころの方向を、失なはしめざる
神慮、千萬かみを神つどへ、集て議り給へるは、公論衆議の源にて、わが皇統の貴とさ
は、ならぶかたなき事ながら、尙も政治に遺漏なく、あらしめむとの神議、君民一和の
政體を、遠き神代のむかしより、定めて今もうごきなき、皇祚のしるしとて、辱も
天照す、御祖尊、御手づから、授け給へる神器、御鏡御劍八尺瓊の、玉の緒ながく萬世
に、人民をおもほす皇道、いまより二千五百三十、三歳あまりのその昔、神武天皇こと
さらに、徳澤いたらぬくまもなく、天下を治めもろくの、民に所を得せしめて、尙人
こゝろ安かれど、天神地祇を大和なる、鳥見の山中靈時に、祭らせ給ふ故事を、日本

書紀に大孝と、書れしことも久方の、天祖の御こゝろを、繼ぎ興します故ぞかし。さ
て後方今の御代となり、神器の徳はいちじるく、國の光をますかゝみ、天下を照し千代
萬、ものゝ文めを明かに、民に心をみがかせて、劍の徳たる兵の、武き備もおごそか
に、または八尺の勾瓊の、五百つ御統にぎびあひ、外國々の交際も、互に遺る憾なく、
國民自由の權を得て、開化に進む世の中を、統御す天皇の賢き御代に生れあふ、人は
古とさら愛國の、こゝろを勉め身を修め、人民保護の意を體し、他人の自由を妨げず、
家職産業怠らで、百工技藝智をみがき、夫婦兄弟姉妹、順序正しくむつましく、親につ
かへて孝をなし、わが子も皇國の民の員、僕婢も同じ人の子と、教へ育て、昔より、君
子の國といはれたる、その實效を顯はすは、今此秋と人ごとに、盡すまことの積りなば、
天つ御空にふたつなき、太陽を摸したる旗じるし、六大洲の外までも、輝かさむは難か
らじ、それもひとりの學文を、つとむるちからによるなれば、子弟ある身はこゝろして、
厚き恵みの設けある、先小學に入らしめよ。(略下)

○本書の巻頭には八田知組の「文明開化」といふ題で詠んだ左の一首が添へてある。

近世神道の社會教化

八十限は異國人にひらかせて

ふむもやすけき我國の道

神道の研究終

昭和五年五月八日印刷
昭和五年五月十二日發行

神道の研究奥附

著者 河野省三

東京市本郷區春木町二丁目二十一番地

發行者 森江英二

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印刷者 柴山則常

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印刷所 杏林舎

電話小石川(七七九番) 四七二五番

不許複製



定價金參圓

發行所

東京市本郷區春木町二丁目

森江書店

電話小石川四一八二番
振替東京八貳壹九番

河野省三先生主要著書目録

- | | | | |
|----------|----|----------|-------|
| 一 神道の研究 | 新刊 | 定價金 參圓 | 送料拾八錢 |
| 一 國民道德史論 | 六版 | 定價金貳圓五拾錢 | 送料拾四錢 |
| 一 國民道德要論 | 三版 | 定價金 貳圓 | 送料拾四錢 |
| 一 神道大綱 | 再版 | 定價金 七拾錢 | 送料八錢 |
| 一 國民道德概要 | 三版 | 定價金壹圓參拾錢 | 送料拾貳錢 |
| 一 神祇史概要 | 四版 | 定價金壹圓參拾錢 | 送料拾貳錢 |
| 一 神祇史要 | 五版 | (絶版) | |

國學院大學教授 河野省三先生著

國民道德史論

菊 判 本 綴
三 百 頁
定價金貳圓五拾錢
送料 金拾貳錢

増訂第六版

國民道德史は日本人の精神生活の活動史である。日本民族の建國以來に於ける國民生活の發達史である、本書は國民道德史に造詣の深い著者が此の立場に據て、博引旁證の材料と赤心報國の至誠とを以て、忠實に而して明快に我國體觀念・祖先崇拜・國民性・神道・武士道等の發達を闡明し、更に國史教育と地理的環境との特質、國民道德研究の沿革等に至るまで之を敘述してをる、而して古來より現代に至るまでの各種の關係書類を細大漏さず之を擧げ、初版より六版に及ぶまで絶えず其の増訂を圖つてをる。教育家・宗敎家・官吏・神職・軍人等の必讀の良書であつて受驗用・講習會用として極めて適切な好參考書である。

國學院大學教授 河野省三先生著

國民道德要論

附録、江戸時代の儒教 心學要論

菊判 本綴
二百七十頁
定價 金貳圓
送料 金拾貳錢

修正第三版

本書は現代思想に直面して現はれた新しい國民道德論である。
本書は國民生活に接觸して建設された堅實なる國民道德論である。
本書は我國國民性を根柢として研究された生氣ある國民道德論である。
本書には國家國體國民性國民道德の發達動機理想特質を論じ更に江戸時代の儒教と心學とに對する新しい倫理的研究が述べてある。
本書は健全なる國民精神の源泉であり又忠實なる國民道德研究の參考書である。而して世の教育者宗教家神道家乃至思想問題に關係を有する人々の好伴侶である。

592.
157

